研究課題	思春期の自閉症スペクトラム児の 仲間関係構築への支援と有効性の検証
研究代表者	井潤　知美 （心理社会学部　臨床心理学科　准教授）

１．研究目的

自閉スペクトラム症（以下ＡＳＤとする）は対人関係やコミュケーションに困難をもつ発達障害である。研究から約 77%が子ども時代だけでなく、生涯にわたり診断基準を満たすことが明らかとなり、生涯発達の視点からそれぞれの発達段階に沿った支援が求められている。

思春期は仲間関係の構築を通して自分を確立する時期である。ＡＳＤ児は、その障害特性により、友だち関係を築き維持することに失敗し、孤立やいじめなどの経験をしやすく、対人恐怖、不安、抑うつといったメンタルヘルスの問題を抱えやすい。現在、わが国で成人期の引きこもりが課題となっているが、その始まりが思春期の傷つき体験にあることは少なくない。

本研究は、これまで焦点があてられてこなかった知的障害のないＡＳＤ児を対象とし、友だち関係を支援するプログラムの構築とその有効性について検討するものである。

２．研究方法

（１）実施概要

①プログラムの概要

PEERS(Program for the Enrichment of Relational Skills)とは、Laugeson 博士によって開発された思春期特有の友だち関係を作り継続するために必要なスキルをターゲットにしたプログラムである。表 1 に示したようなスキルを含む、全 14 セッションから構成されている。

表１ PEERSで学べるスキルの例	
☆友達と楽しく会話をする方法	☆自分にあった友だちの見つけ方
☆電話・ネット・SNSの使い方	☆会話に入る/会話から抜ける方法
☆ユーモアの適切な使い方	☆友達と楽しく遊ぶためのルール
☆からかい/いじめへの対応方法	☆思いのすれ違いへの対応方法

②実施方法

本来は対面での実施であるが、Covid-19 の影響をかんがみ、全セッションをオンラインでの実施とした。

③実施スケジュール

2020 年 10 月～2021 年 3 月、おおよそ隔週で全 14 セッションを実施した。

時間は土曜日 15 時～16 時半である。毎回、14 時～15 時に事前ミーティングを行い、セッション終了後、16 時 45 分～17 時 45 分に事後ミーティングを行った。

④グループの構成

PEERS は保護者セッションと子どもセッションの 2 つに分かれ、同時並行で行うものである。

保護者セッションはリーダー1 名、サブリーダー1 名、アシスタントとして PEERS を学んだ大学院生が 5 名、参加者 6 名で構成された。子どもセッションはリーダー 2 名、サブリーダー1 名、ソーシャルコーチとして PEERS を学んだ大学院生 4 名で構成された。子どもグループのリーダーは前半（宿題のふりかえり）と後半（今日のテーマ）で分かれた。

事前・事後ミーティングは保護者グループ・子どもグループのスタッフ全員で行い、情報の共有を図った。

（２）研究協力者

研究協力者は、知的に遅れがなく ASD と診断された中高生 6 名とその保護者 6 名である。今年度は全員が男子であった。学年は中 1（1 名）、中 2（1 名）、中 3（1 名）、高 2（3 名）であった。保護者は全員が母親であった。

募集は大正大学カウンセリング研究所、研究代表者の関わりのある児童精神科、小児科等にチラシを配布して行った。参加申し込みのあった保護者・子どもそれぞれと面談を行い、プログラムの概要を説明し、以下の条件を満たすものを受け入れた。

・お子さんが中高生であること
・ASD の診断があり、知的障害が無いこと
（PEERS のプログラムを理解できる言語能力があること）
・子ども本人に参加の意欲があること
・グループでの参加が困難なほどの顕著な問題行動がないこと（攻撃性、非行等）
・保護者がコーチとして参加できること
・オンラインの場合はデバイスが親子それぞれにあること
・wifi 環境にあること

なお、事前面談で、研究への協力は任意であること、プライバシーは尊重されること、協力に同意した後もいつでも撤回できることなどを書面と口頭で説明した。

（３）分析方法

効果を検証するために、PEERS 実施前後で以下の調査票への回答を求め、事前事後での得点を比較する。

①子ども

TASSK 日本語版：PEERS で学ぶ友だちづきあいの知識をたずねるもの。
QPQ 日本語版：遊びの様子についてのたずねるもの。
YSR：情緒と行動の問題全般に関してたずねるもの。
②保護者
SRS-2（対人応答性尺度）：社会的障害を測るもの。
QPQ 日本語版：遊びの様子についてたずねるもの。
Vineland II ：適応行動全般についてたずねるもの。
CBCL：情緒と行動の問題全般についてたずねるもの。

さらに、PEERS 終了後に、子ども、保護者それぞれに、プログラムに参加したことがどのような体験であったかをたずねるインタビュー調査を行った。

３．研究成果と公表

（１）研究成果

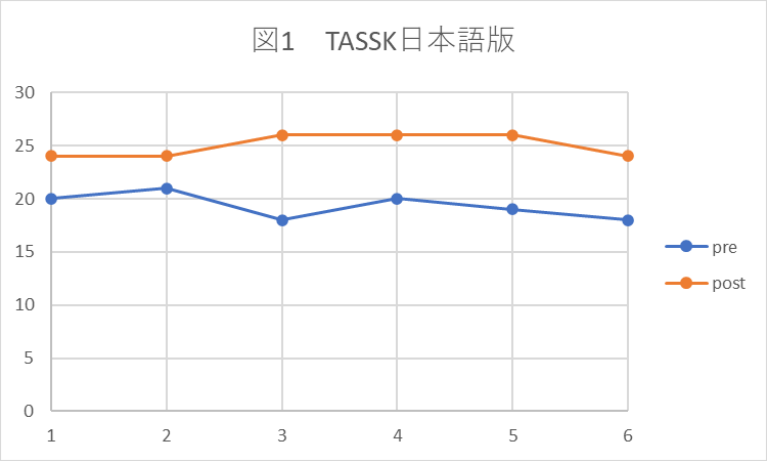
我が国では初のオンラインでの実施であったが、毎回の打合せを通して、保護者・子どもが参加しやすい工夫を積み重ねて、無事に 14 セッションを実施できた。コロナの影響で対面でのプログラム実施が困難な状況において、オンライン版の実施マニュアルを成果物として公表していくことを考えている。

また、コロナ禍でなくとも、日本の中高生は塾や部活動などで忙しいため、オンラインの実施は参加しやすいという声が参加者から得られた。懸念されたロールプレイや話しあいも、ブレイクアウトルームの使用やソーシャルコーチの活用により実施できたことの意義は大きい。

（２）結果

3 月半ばにプログラムが終了し、調査票データの入力、インタビューデータの入力を終えたところで現在分析中である。

TASSK 日本語版（友だちづきあいの知識）では、図 1 に示す通り、全員が参加前よりも参加後に得点が高くなっていた。26 点満点であるが、3 名が 26 点（18 点→26 点、20 点→26 点、19 点→26 点）、3 名が 24 点（20 点→24 点、21 点→24 点、18 点→24 点）であった。宿題の実施やセッションで繰り返し練習することで確実に知識として身についたことがわかる。



QPQ で尋ねる友だちとの遊びであるが、コロナ禍であるため実

際に友だちと会う機会が制限されており、プログラム開始前も開始後も機会がほとんどないという結果であった。しかし、インタビューから、遊びの企画はほとんどないが、電話やオンラインを通しての関わりが増えたことが語られていた。

保護者による Vineland 適応行動尺度では、6 名全員がプログラム開始前よりも開始後に得点があがっていた。たとえば、A くんは中 2 であるが、適応行動総合尺度得点が 59 点→69 点に変化した。内訳として、コミュニケーションが 57 点→63 点、日常生活スキル 79 点→98 点、社会性 64 点→70 点であった。A くんは部活動でいじめにあい、不登校となっていたが、4 月には生徒が帰宅したあとであったが教室に入り、担任と会話を楽しんだという報告があった。

今後の展望としては 2 点あげられる。1 点目は 2021 年 6 月に実施予定のフォローアップ調査である。PEERS で学んだスキルはプログラム終了時だけでなく、長期にわたって活用できるものであり、対人コミュニケーションの改善が持続すると米国では報告されている。わが国ではフォローアップデータがほとんどないため、学んだ知識やスキルが日常生活の中でどのように活用され、維持されているかを検証する。2 点目としては学内での実施である。今回は保護者をコーチとするプログラムをお実施したが、日本の中高生は学校で過ごす時間が長いため、予防的な観点からも校内で PEERS を実施することを検討している。

（3）公表の仕方

2021 年 11 月に行われる日本児童青年精神医学会にて、PEERS オンライン版の効果について子どものスキル、メンタルヘルスの変化については研究代表者の井澗が、保護者の子どもへの関わりの変化について共同研究者の西牧が発表の予定である。また、並行して論文化し、「児童青年精神医学とその近接領域」に投稿の予定である。

オンライン版の実施マニュアルの作成も行う予定である。